剪淞吟社史稿　その四

入谷仙介

一

明治三十八年の春、上京した横山耐雪は、三月二十一日に、森槐南によって向島枕橋の八百松楼に招かれた。同席者は九名、耐雪の恩師、永坂石埭のほか、いずれも東京詩壇の名家である。

数日のうちに、耐雪は同席者の一人であった菊池惺堂を訪ねた。惺堂は慶応三年生まれで、耐雪より一歳の年長であるが、ほとんど同年輩であるから、親しみを感じたものであろう。

訪菊池惺堂晋二詞契用八百松楼讌集詩韵賦呈併贈皎亭内野悟一郎詩家。(菊池惺堂晋二詞契を訪い、八百屋楼讌集の詩韵を用て賦して呈し、併せて皎亭内野悟一郎詩家に贈る)[1]

偶然邂逅手同携　偶然　邂逅して　手を同に携え
石上三生夢転迷　石上　三生して　夢は転た迷う
古印満函堆玉顆　古印　満函　玉顆を堆み
奇書連屋燦金泥　奇書　連屋　金泥を燦かす
冐簾花影軽相倚　簾を冐けて　花影　軽く相い倚り
繞榻香烟仄不斉　榻を繞りて　香烟　仄かに斉しからず
領略春窓灯一味　領略す　春窓　灯一味
句成也合句中題　句成りて　也た合す　句中の題

二首連作の第一首である。頸聯領聯は惺堂の書斎のたたずまい。惺堂は日本橋元浜町で手広く呉服をあきなう豪商の当主で、実業家であった。第二首は趣きが変って、「新婦磯(嫁が島)廻りて舟を繋ぐべく、大仙岳近くして月親しむに堪う」と松江の佳景を詠じ、「臂を湖雲に把らん祠樹の浜」と、惺堂の来遊を誘う。

惺堂の次の詩は、おそらくその日の作であろう。

横山耐雪自雲州至滞京二旬今将還郷倒用其松江留別詩韵以送別(横山耐雪、雲州より至り、滞京二旬、今将に郷に還らんとす、其の松江留別の詩韵を倒用し、以て送別す)

暖雨養花花有情　暖雨　花を養い　花に情有り
春迎遠客醉江城　春に遠客を迎えて　江城に醉う

吟聯墨上題襟集　吟は墨上に聯り　襟に題して集い
夢趂山陰回棹行　夢は山陰を趂いて　棹を回らして行く
吾輩因縁関夙定　吾輩の因縁　夙定に関り
君家旗幟自今明　君が家の旗幟　自今明きらかなり
当歌一曲人将別　当に一曲を歌うべし　人将に別れんとす
也向樽前暗恨生　也た樽前に向かいて　暗恨生ず

詩題からすると、三月三十日ごろの作であろうか。耐雪の帰郷の日もせまっていた。

文人墨客の集まる高級社交場として著名であった星岡茶寮[2]の雅集にも招かれる機会があった。のち、一代の通人芸術家とうたわれた北大路魯山人（一八八三―一九五九）の経営する所となって、さらに有名になった所である。

星岡茶寮探驪文社席上偶賦[3]（星岡茶寮、探驪文社の席上に偶たま賦す）

一縷茶烟出綺櫳　一縷の茶烟　綺櫳を出で
小簾吹白落梅風　小簾　吹白す　落梅の風
新詩好与故人読　新詩　好し　故人に与えて読ましめん
春在残香漠漠中　春は残香の漠漠たる中に在り

探驪文社は未詳であるが、転句からして、耐雪の旧友が開いていた詩文の会に招かれたものに違いない。詩会でありながら、同作者の詩を全く録せず、耐雪の作も、綺麗でまとまっているが、軽く、場所柄のわりに気楽に作っている。医者仲間か何か、比較的初心の人の集まりだったのではないか。

土居香国（一八五〇―一九二一）を訪ねたのは、三月の末日、三十一日でもあったかと思われる。香国は当時五十四歳、鬱然たる詩壇の長老であった。

訪土居香国通豫花史分韻（土居香国通豫花史を訪い分韻す）

紅塵不到酒樽前　紅塵　到らず　酒樽の前
静座詩情全近禅　静座　詩情　全く禅に近し
梟娜柳烟吹漸緑　梟娜たる柳烟　吹いて漸く緑に
満城春雨売錫天　満城の春雨　錫を売るの天

この時、香国にも詩がある。

横山耐雪見訪分韻得真聞帰期在近詩中故及（横山耐雪の訪わる、分韻して真を得たり、帰期近きに在りと聞く、詩中故に及ぶ）

春風三月浥軽塵　春風　三月　軽塵を浥し
墨上花開詩斬新　墨上　花開きて　詩斬新
帰去淞江春又好　淞江に帰去すれば　春又た好からん
碧雲湖上美帰人　碧雲湖上　美帰の人

香国の詩から見ると、まだ四月に入っていなかったのである。三月末から四月初にかけて、帰期のせまった耐雪は、暇乞いのために歩きまわっていたのであろう。

二

永坂石埭は、帰期のせまった耐雪を、ふたたび祭詩龕に招いて、別宴を張った。岩渓裳川と土居香国とが一座した。香国が来ている所から見ると、あるいは祭詩龕に行く前に香国を訪ね、同道したの

かもしれない。この時は、あるじの石埭には詩が残らない。耐雪は七絶を一首作った。

将還郷石埭先生置酒于祭詩龕見餞同裳川香国両詞宗賦分得三字[4]（将に郷に還らんとし、石埭先生酒を祭詩龕に置きて餞せらる、裳川香国両詞宗と同に賦して分かち、三字を得たり）

涙燭影寒愁暗含　涙燭　影は寒く　愁いを暗に含み
一樽話別倚詩龕　一樽　別を話して　詩龕に　倚る
明朝複水重山隔　明朝　複水　重山を隔て
古駅春風五十三　古駅の春風　五十三

耐雪は後述するように、四月三日の随鷗吟社創立大会に出席しその夜の汽車で西下している。したがって転結を文字通りに解するならば、この詩は三日の作なる。しかし、起句は夜景のように思われ、香国の詩も夜景らしく感じられる。三日の夜に向島八百松の大会会場から、神田の祭詩龕まで引返して、酒を汲みかわす時間の余裕は無かったであろうから、この詩は二日の作で、転句は、明日汽車に乗ることをいうのであろう。

裳川もやはり七絶で酬いた。

祭詩龕送横山耐雪還郷[5]（祭詩龕に横山耐雪の還郷を送る）

思家詩客過清明　思家の詩客　清明を過ぎ
三月落花空復情　三月　落花　空しく復た情あり
応有一声啼雎餞　応に一声の啼雎の餞あるべし
江南春樹雨中鶯　江南の春樹　雨中の鶯

この日は春雨が降っていた。承句の三月は、落花の縁語として、旧暦を用いたものであろう。

香国は七律を作った。三家のうちでは、もっとも力作である。

祭詩龕酒間分字送横山耐雪還出雲（祭詩龕の酒間に字を分かち、横山耐雪の出雲に還るを送る）

忽漫逢時又別觴　忽ち漫に逢う時　又た別觴
雨中剪燭祭詩堂　雨中　燭を剪る　祭詩堂
健竿竹影皆名画　健竿の竹影　皆な名画
大萼梅花抵夜光　大萼の梅花　夜光に抵(あた)る
人自碧雲湖上去　人は自のずから碧雲湖上に去り
春於墨水渡頭忙　春は墨水の渡頭に忙(あわただ)し
除非薏苡唯金玉　薏苡に非るを除けば唯だ金玉
不怪帰装重錦囊　怪しまず　帰装　錦囊重きを

頷聯は祭詩龕の景で、あるじに対するあいさつ、夜光は月であって、この夜は雨であったから矛盾するが、梅花と月光という、昔ながらの取合せである。尾聯、耐雪が東京で多くの収穫を得て帰ることをいう。

三

四月三日、八百松楼で、随鷗吟社第一回大会が催された。同社は前年の秋に創始され、毎月例会を開いていたが、大会と銘打って、多くの詩人を集め、詩壇の一大エベントとするとともに、衰えつつあった漢詩を振興するための一大対外デモンストレーションとすることを期したのであろう。この日は神武天皇祭に当っていて、休日

でもあり、「建国の祖」の祭日であるから、創業の集いにふさわしかった。『随鷗集』第八篇の「墨上佳話」は、大会の状況を詳細に伝える。耐雪もその夜の汽車で帰郷という、あわただしい日程の中で、この大会に参会した。

大会は、榎本桜東、小林天龍、勝島仙坡、渡辺雨山、菊池惺堂、木村天南、内野皎亭、木村梧窓、藤村晴濤、手島海雪、上村売剣の十一人が幹事を委嘱され、永坂石埭が幹事長格となり、二回に渡って会合を重ねて、準備万端をととのえた。

当日は朝から曇天で肌寒く、午後になって雨が降ってきた。この年は開花が遅れ、隅田川の堤上の桜並木も、ようやくつぼみがふくらんで来たばかりで、春とはいえ、あまり陽気はよくなかった。しかし、詩人たちは、悪天候を物ともせず、陸続として集まった。その中には、耐雪はじめ、岡山の荒木看雲、信州の横川三松、小樽の小笠原菱崖、函館の杉浦柳渓、田中五稜、大条金堂など地方からの上京組、王黍園、薄梅処の中国人の顔も見られた。

別室に設けられた控室には、東久世竹亭、杉渓六橋の公卿華族、旧対馬藩主の宗星石、股野藍田、田辺蓮舟、永坂石埭、矢土錦山らの諸大家の寄贈した書画八十余紙を掛け連ねて展観し、かつ、くじ引で一人に一点を頒布した。別室では風流僧山田寒山が窯をしつらえて楽焼をしており、来客は自分が字を書いた酒杯や灰皿を、その場で焼かせて受け取るという趣向であった。

午後三時、一同は本席に移り、森槐南が「詩と音楽の関係」という題で、約一時間講演し、ついで膳部が出て酒宴が始まった。膳に載せられている杯にも趣向があった。記念品として、特別に制作させたもので、内側にはつがいのかもめが画かれ、外側には随鷗吟社の印が押され、糸底には平韻の韻字が書きつけられていた。詩会においては分韻と称して、韻字をくじ引で分配し、引きあてた韻字を用いて作詩するのであるが、その代りに、杯に書かれていた韻字を用いるのである。杯を手に取った人々は、みなにっこりした。

酒がほどよくまわった所で、詩会の約束通りに柏梁体聯句となった。これも韻書をひっくり返して字を探す手間を省くために、くじ引で字を割りあてた。出席の通知が来ていて欠席した四五名には、幹事が代ってくじを引き、郵便で知らせた。したがって『随鷗集』に掲載されているものは、後日、それらの人々から送られてきた句を加えて編集されたものと思われ、実際の参加者よりもやや多いと考えられるが、名を連ねているのが、東久世竹亭、榎本梁川、渡辺無辺以下八十人に達し、森槐南、永坂石埭をへて、随鷗吟社主幹、大久保湘南に至って終る。耐雪は五十九番めにつけている。聯句の一部を抄出する。

万里征戎獲熊羆（万里征戎熊羆を獲たり）　東久世竹亭
東亞西歐無藩籬（東亞西歐籬無し）　榎本梁川
乾旋坤転斗杓移（乾旋り坤転じて斗杓移る）　渡辺無辺
蜂雄為笑蛺蝶雌（蜂雄にして為に笑う蛺蝶の雌）野口寧斎
擬同釣人一簑披（釣人と同に一簑を披んと擬す）上夢香
本事詩成興相追（本事詩成り興相い追う）　横山耐雪
詩歌爛発墨之涯（詩歌爛発す墨の涯）　荒浪烟崖
満堂賓客祓成帷（満堂の賓客祓帷を成す）　金井秋蘋
如此盛会曽無之（此の如きの盛会曽て之無し）江木冷灰

会者七十人有奇（会者七十人有奇）　森槐南
詩家功亦竹帛垂（詩家の功亦た竹帛に垂る）　永坂石埭
不問大雅扶輪誰（問わず大雅扶輪するは誰ぞを）大久保湘南

時あたかも日露の戦中、正月に旅順が降り、三月に奉天に勝ち、日本海海戦を前にして、国民の意気大いにあがった時期、社員の松田学鷗は従軍していて、旅順から詩が届くという状況であった。始めの三句以下、戦争を反映した付句が多い。寧斎、烟崖は時候の句、秋蘋以下は今日の盛会を喜ぶ祝儀の句、湘南の結句は、大雅、すなわち詩道を大いに張るのは我々の力だという、大会宣言ともいうべきもの。耐雪の付句は、今日作られる詩の一つ一つについて『本事詩』詩にまつわるエピソードを集めた書物ができるという、やはり祝儀的な句である。

酒はようやくたけなわに、妓女十数人が座興を助け、十二分に歓を尽くした一同が解散した時には、午後九時を過ぎていた。ともし火は煌煌と輝き、大川の川面には、春雨がおぼろにかすんでいる。汽車の時間を気にしていた耐雪は、おそらく適当な時間に切りあげて、停車場に人力車を急がせたものであろう。

四

耐雪は随鷗吟社第一回大会に大きな期待をかけ、勢こんで出席したようである。彼はこの席上で、こうした場合には異例の、長篇の七古を作っている。

乙巳随鷗大会席上分韻[6]（乙巳のとし随鷗大会席上分韻）

春雲蕩漾烟糢糊
雨痕吹緑連平蕪
一帶春水湛藍碧
夾岸垂柳千万株
前度勝会賦冶春
猶記随鷗過酒壚
八百松楼高百尺
夕陽罨画風景殊
再会是日群賢集
主客咳唾看成珠
筆底龍蛇躍而走
墨痕如雨淋漓濡
都門新味炰炙外
朱桜紫筍満豊厨
酒酣耳熱神気王
花前扶醉有彼姝
聞説皇師頻大捷
宇内具瞻皇朝謨
奎運日昌淵源遠
詩人功業誰云迂
燕然須勒河清頌
文章未必師韓蘇
此時晩雲忽己散
翠黛分明波山孤

春雲　蕩漾して　烟糢糊たり
雨痕　緑を吹いて　平蕪に連なる
一帶の春水　藍碧を湛え
夾岸の垂柳　千万株
前度の勝会に冶春を賦し
猶お記す　鷗に随いて　酒壚を過ぎりしを
八百松の楼　高さ百尺
夕陽の罨画　風景殊なり
再会の是の日　群賢集い
主客の咳唾　看れば珠を成す
筆底の龍蛇　躍りて走り
墨痕　雨の如く　淋漓として濡る
都門の新味　炰炙の外
朱桜　紫筍　豊厨に満つ
酒酣　耳熱　神気王んに
花前　酔いを扶くるは　彼の姝有り
聞説く　皇師　頻りに大捷し
宇内　具に瞻る　皇朝の謨
奎運　日に昌んなるは　淵源遠く
詩人の功業　誰か迂なりと云うや
燕然　須く勒すべし　河清の頌
文章　未だ必ずしも韓蘇を師とせず
此の時　晩雲　忽ち己に散じ
翠黛　分明にして　波山孤なり

笛声度水響嘐喨　　笛声　水を度りて　響き嘐喨
春月依依生菰蒲　　春月　依依として　菰蒲に生ず
山陰勝事奚足道　　山陰の勝事　奚ぞ道うに足らん
騒壇長留百世模　　騒壇　長く留む　百世の模
好裁剡渓藤十丈　　好し　剡渓の藤十丈を裁ちて
写出墨上修禊図　　写出せん　墨上　修禊の図

全三十句、一韻到底の力作であって、当日の風景から歌い起こして、詩会の情景を描写し、転じて日露の戦勝に言及して、詩人に功業の道ありと気炎をあげ、再び夜となった風景を描き、いにしえの蘭亭の会（山陰の勝事）にも劣らぬ、図を作って後世に伝える価値があると結ぶ。整然たる結構、堂堂の気格、満場を圧せんばかりである。がんらい耐雪は即席に七古の大作を作ることを好み、剪淞吟社の創立大会でも七古を作って、村上琴屋から「長槍大戟を揮ふて見せた」[7]と評された。

耐雪のこの意気ごみは酬われたのであろうか。私にはどうもそうでなかったように思われる。先の「墨田佳話」には、当日の作、四十三首を録するが、そのうちに耐雪の七古は入っていない。のみならず、『随鷗集』にその後掲載されたもようもない。完全に黙殺されたもののようである。

四十三首は「席上の分韻、投贈の諸作未だ尽く整頓に遑あらず、今姑く獲るに随って之を録す」として掲載されているもので、かならずしも選ばれたことが価値評価を示すものではないようだが、そこにおのずから選択基準が見受けられる。一人で二首取られている人がいるので、人数にすると三十八家である。その配列を見ると、東久世竹亭、渡辺無辺、松浦鸞洲（旧平戸藩主）の貴顕、長老の股野藍田、有力な後援者である江木冷灰、永井禾原と並び、土居香国、岩渓裳川、関沢霞庵といった著名詩人が上位に置かれ、その後にようやく一般の詩人が来る。その中で地方在住の詩人としては小樽から来た小笠原菱崖のみである。最後に野口寧斎が詩壇の大家として、別格の扱いで置かれている。槐南、石埭ら第一流は、かえって詩を残していない。自重して作らなかったのかもしれぬ。選択の基準は詩的価値よりも、社交的な要素を加味した、東京詩壇の地位序列に左右されたのである。

「墨田佳話」に収録された席上作は、たとえば次のようなものであった。冒頭の竹亭の作である。

随鷗吟社大会席上分韻得支（随鷗吟社大会の席上に分韻して支を得たり）

画楼簾幕雨如糸　　画楼　簾幕　雨糸の如し
剛是桜花欲笑時　　剛に是れ　桜花　笑わんと欲する時
觴政厳寛紅袖侍　　觴政　厳寛　紅袖侍し
詩盟澹泊白鷗随　　詩盟　澹泊　白鷗随う
群賢畢至山陰興　　群賢　畢く至る　山陰の興
耆旧同銜北海巵　　耆旧　同じく銜む　北海の巵
最是主人才藻麗　　最も是れ　主人　才藻麗なり
只須採筆賦春熙　　只だ須く　採筆もて春熙を賦せよ

詩の大部分は七律で、それに少数の七絶と五律がまじる。詩会というのは社交の席であるから、それにふさわしい形式と内容とが要求されるのである。耐雪の作は、詩としての内容、完成度以前の問

題として、あまりにも場の雰囲気を無視した放胆な行動と受けとられたのであるまいか。田舎者の「つっぱり」「やぼくささ」とさえ見られたかもしれぬ。東京の詩壇は、それ自体に確固たる内部秩序を持っていて、それは地方無名の一詩人が、晴れの舞台とはいえ、一回の詩会、一首の詩で、にわかに踊り出られるほど、やわなものではなかった。つまりは耐雪は軽くいなされたのである。

おそらく耐雪は、これまで東京の至る所で、珍客として歓迎を受けていたのであろう。その頂点が八百松での槐南の招宴であった。その過程で、これまでつちかってきた詩に対する自信がふくれあがり、東京くみしやすしとまでは思わなくても、随鷗吟社第一回大会という檜舞台で一挙に詩壇に地歩を占める機会をつかみうると思ったのではなかろうか。もとより、それが成功しなかったからといって「席を蹴って立つ」とか、中央詩壇に絶縁を宣言するとかするほどに、耐雪は「子ども」ではない。表面、さりげなく詩友に別れを告げて会場を出たであろう。あるいは自分でも失望感など意識せずに、盛会に列しえた満足感にあふれて帰郷したかもしれぬ。だが、心の底に沈澱した何物かがあったのではないか。それが今後の彼の軌跡、ひいては剪淞吟社の歴史に、微妙な影響を及ぼしていったように思われる。

耐雪はその後、没するまで、随鷗吟社の年次大会に、ついに出席しなかった。また随鷗吟社の中でも準社員のままに止まり、正社員にはなろうとしなかった。

五

耐雪は四月三日の夜、八百松楼を辞すると、その足で夜行列車に乗りこみ、京都に向かった。

四月三日夜発東京抵西京（四月三日夜東京を発して西京に抵る）

塔影参差出夕峰　塔影　参差として　夕峰に出で
春風吹夢易惺忪　春風　夢を吹いて　惺忪（せいしゅう）なり易し
十年重作洛陽客　十年　重ねて作る　洛陽の客
独聴東山寺寺鐘　独り聴く　東山　寺寺の鐘

東京で耐雪の得たものが何であれ、上京中、絶えず緊張に包まれていた彼の心身を、古都は柔く包んで解きほぐしてくれた。東京のことは春風の夢であったと見る余裕も生まれた。十年ぶりの京といえば、前回の東京遊学の時に立寄ったものであろうか。

京都では月波楼というのに宿を取った。頼山陽らの文人と交遊のあった名妓お梅の旧居だという。

宿月波楼楼梅校書故宅也（月波楼に宿す、楼は梅校書の故宅なり）

芳草芊眠吹暖烟　芳草　芊眠（せん）　暖烟を吹き
鶯花時節鴨河天　鶯花の時節　鴨河の天
風流不見当壚女　風流　見ず　当壚の女
寂寞楼台七十年　寂寞たる楼台　七十年

宿にはお梅の用いた三味線箱が保存されていた。箱には浦上春琴

が桂花をえがき、山陽が詩を題していた。

月波楼観梅校書三絃筐（月波楼に梅校書の三絃筐を観る）

酔墨猶擬痕未乾　酔墨　猶お擬す　痕未だ乾かず
手開遺筐剪灯看　手ずから遺筐を開きて　灯を剪りて看る
断腸情繫三絃索　断腸　情は繫ぐ　三絃の索
憶到当年子夜弾　憶到す　当年　子夜を弾ぜしを

自注、三絃筐、浦上春琴桂花を画き、頼山陽詩を題す。詩に云う「酒醒めて東楼燭影乾き、月来たりて簾角夜方に闌なり。雪児亦た解す吟人の意、撥を絃中に挿して弾くを肯んぜず。」

子夜は古い中国の俗曲、その名の女性が歌ったという。

京都までは荒木看雲が同行した。看雲は前記のように岡山から随鷗吟社の大会に出席した人で、やはり医師であった。ドイツに留学したことがあり、その時の送別の詩を耐雪が作っている。(8)

同荒木看雲蒼太郎国手遊嵐峡（荒木看雲蒼太郎国手と同に嵐峡に遊ぶ）

松翠霏霏重一重　松翠　霏霏　重一重
与花掩映午雲濃　花と掩映して　午雲濃し
僧房蔵在糢糊裏　僧房は蔵して糢糊の裏に在り
空際時伝飯後鐘　空際　時に伝う　飯後の鐘

どういう縁があったのか、荒木鳳岡に招かれて、鴨川の旗亭で飲んだ。看雲も同行した。鳳岡は本名寅三郎（一八六六―一九四二）、群馬県の人、わが国生化学の開拓者、当時京都帝国大学医科大学教授、のち医科大学長、京都帝国大学総長、枢密顧問官を歴任、帝国学士院会員となった。

荒木鳳岡寅三郎招飲鴨東旗亭同看雲赴之（荒木鳳岡寅三郎博士に鴨東の旗亭に招飲せられ、看雲と同に之に赴く）

京洛尋春不謂遅　京洛　春を尋ぬる　遅しと謂わず
東風三月最宜詩　東風　三月　最も詩に宜し
海棠雨罷胭脂重　海棠　雨罷みて　胭脂重く
看取錦官城裏姿　看取す　錦官城裏の姿

錦官城は成都、海棠は成都の名花。なお、耐雪は和習を避けよという石埭の教えを忠実に守ったためか、桜花の詩をほとんど作っていない。桜は日本の典型的な名花であるため、詩に取入れると、それ自体が和習を感じさせるのをきらったのであろう。耐雪だけでなく、一部の詩人にその風があったようで、永井禾原も自邸に桜を植えさせなかった。(9) あたりまえなら桜花を持ってくる所を、錦官城の縁で海棠を持ってきたのにちがいない。

京都の滞在は短かかったが、由緒ある宿にくつろぎ、名勝の地を訪い、詩心を大いに養ったことと思われる。

六

四月八日には、耐雪は無事、松江に帰着した。待ちかねていた親友、村上琴屋が、さっそく臨水亭に招いて歓迎の小宴を催した。

四月八日自東京帰村上琴屋寿夫招飲松江臨水亭次見示詩韵（四月八日、東京より帰り、村上琴屋寿夫松江臨水亭に招飲せらる、示されし詩韵に次す）

一曲誰翻子夜歌　一曲　誰か翻えす　子夜歌
深深花霧鎖香羅　深深たる花霧　香羅を鎖す
客中詩債難償得　客中の詩債　償い得難し
衫上空留酒曇多　衫上　空しく留む　酒曇の多きを

結句は陸游の「劍門道中微雨に遇う」(10)の起句「衣上の征塵酒痕を雑う」をふまえる。この詩は転句「此の身合(まさ)に是れ詩人なるべきや未だしや」で有名、対金反攻の夢破れた陸游が、自分の運命をかみしめてもらしたつぶやきである。耐雪もひそかに共感する所があったのであろう。

注(1)　以下、詩の引用は、特に断らない限り、横山耐雪、東游吟稿による。この詩は松心榭詩鈔に収める。

(2)　麹町山王台（現永田町二丁目五七）にあった。

(3)　この詩は松心榭詩鈔に収める。

(4)　この詩は松心榭詩鈔に収める。題を「将還郷石埭先生置酒于祭詩龕見餞裳川香国両詞宗亦来会分得三字（将に郷に還らんとし、石埭先生酒を祭詩龕に置きて餞せらる、裳川香国両詞宗も亦た来会せらる、分かちて三字を得たり）」に作る。

(5)　この詩は裳川自選稿に収める。題を「送横山耐雪帰雲州（横山耐雪の雲州に帰るを送る）」に作り、春樹を樹色に作る。

(6)　この詩は松心榭詩鈔に収める。題を「随鷗吟社第一大会席上分韻得虞（随鷗吟社第一大会の席上に分韻して虞を得）」に作る。終りから三句めの模を、吟稿は摸に作るが、詩鈔に従った。

(7)　村上琴屋「剪淞吟社の創立と槐南翁の回顧」剪淞詩文第七十九編。

(8)　「送荒木看雲之独逸」松心榭詩鈔。

(9)　永井荷風「大窪だより」全集巻十二。

(10)　陸游「劍南詩稿」巻三

補訂

前稿「その三」で、大久保湘南訪問を、森槐南による招宴より前のこととしたが、東游吟稿には、槐南招宴の詩を、湘南、安広龍峰との百花園の遊の詩よりも後に置いてあるので、招宴の方が先であったと思われる。百花園の詩の後に菊池惺堂訪問の詩が来る。